

コソアの用法の研究

ー根本原則のキャンセル条件ー

(誤用研究中間報告)

酒 井 たか子

はじめに

「コソア」に関する問題は、これまで数多く論じられてきた。一般に支持されている用法の「通則」もすでにある程度確立し、それらにしたがった教え方もかなり普及しているはずである。しかし、日本語が相当に上手になった人でも「コソア」の誤用がしばしば見られる。

このことは、一つは学習者が従っていると思われる「通則」自体に問題がある場合ともう一つは学習者が自己本意の「通則」に支配されている場合とから生ずるのではなかろうか。

そこで本稿では日本語学習者がどのような用法の「通則」に従っているのか、また、「通則」が学習者独自のものであれ、一般に支持されているものであれ、それが誤用を導く原因であるとするならば、如何に訂正すれば良いのかを考えてみたい。

誤用例は、留学生に質問紙の形で問題を与えて答とその理由を尋ねたもの、ブレースメント・テスト、および自由会話時の誤用から取り上げた。¹⁾

本稿は、まだ検討が足りないことを痛感しているが、学習者がステップを踏んで理解できるような通則を作る一つの過程としたい。

I. 眼前指示用法通則とそのキャンセル条件

「コソア」の眼前指示用法（現場指示用法）については、佐久間(1966)、三上(1970, 1972)を始め、これまでに多くの研究がなされている。

佐久間(1966)は、コ・ソ・アを「一応距離の相異にもとずくとしての近称・中称・遠称」とした上で「自称・対象・他称という、対話の場における対立関係に対して、内面的な交渉をもつ」と述べている。つまり<コ>は「発言者・話手の自分の手のとどく範囲、いわばその勢力圏内にあるもの」、<ソ>は「話し相手の手のとどく範囲、自由に取れる区域内のもの」、<ア>は「こうした勢力圏外にあるもの」をさすと説明している。(p 19-22)

三上(1972)は「1. 楕円のーA称ソレ対H称コレ 2. 円のー遠称アレ対コレ（相手は消極化）」に分けて考えている。(p 177-178) 楕円の対立とは、「相手と話手との原始的な対立の様式」で「楕円を折半してめいめいの領分として向かい合っている」状態であり、<コ>は「話し手の領分内にあるもの」、<ソ>は「相手の領分内にあるもの」をさす。一方、円の対立とは、相手と話手が「我々」となって、「円内」になり、「円外」と対立している状態である。<コ>は「円内」、<ア>は「円外」をさす。そして、楕円と円は「心理的な問題」であって、実際の距離ではないと説明している。

1) 物理的距離と心理的距離について

さて、次の例を考えてみよう

例1 1 A : (写真を手に持って) きれいなところね。どこで撮ったの。

2 B : 先週、日光に行った時のよ。

3 A : (写っている人を指さして)

{	この	}	人はだれ。
	その		
	あの		

4 B : ビルマのラオさんよ。

正解はこのである。眼前で写真を指さしているので写真の人物が話し手の勢力範囲にあり、通則通り<コ>になるわけだが、あのを選ぶ誤りが初級段階の学習だけでなく中級段階でも多くみられた。誤りの原因は写真の中の人には自分の知らない人で遠い存在だから<ア>になるというわけである。

◆ 絵や写真などで、写っている人やその場所を知らないことが、勢力圏外の<ア>には当てはまらない。

鉛筆を手にもちながら「その鉛筆はだれのですか」(イギリス人の誤用)という誤りも心理的な距離(自分の所有物ではない)と物理的な距離の選択上の誤りで上記と同種のものと思われる。

例2 1 子 : ちょっと出かけてくる。

2 母 : どこに行くの。

3 子 : 友達のうち。じゃあ行ってきます。

(少し間をおいて)

4 母 : ヒロくん。(子供の名前を呼ぶ) あれ,

{	この	}	子もう出かけちゃった。
	その		
	あの		

のかしら。

4の文では「勢力圏外」または「円外」の通則を適用すればあのになるはずだが、話し手の心理的な「勢力範囲」が及ぶものとしてこのにする誤りが多かった。特に中国語、韓国語では自分の子供に対して、眼前、非眼前を問わず<コ>を用いるということなので、そこから生じた誤りとも考えられる。後で触れる話し手の親族等に関する条件とも関係があるろう。

例3 (レストランに入って座る)

1 A: 何食べようか。

2 B: 何にしようか。

3 A: ねえ。(他のテーブルでスパゲティを食べている人を見やりながら)

{ この } スパゲティおいしそうだね。
{ その }
{ あの }

3 Aはあのが正解だが、距離的に近いからこの、または眼前に見えるからそのという誤りが多く見られた。例えばショーウィンドーの前での会話であれば、この、そのでも良いのだろうが、例3の場合は他人の所有物について(その人に聞こえないように)話しているので、物理的距離は関係せず、「勢力圏外」または「目的」なくア>というとりえ方になる。

◆ 他(自、対以外の)の眼前にあるものや所持している物で、話し手も相手も直接手が出せないような状況にあるものの場合には、話し手の近くにあるうとも「勢力圏外」または「目的」ととらえ、<ア>を用いる。

2) 引用節の場合

例4 たった半年の外国旅行から帰ってきて富士を見た時は { こんな } にも美しい山だったの
{ そんな }
{ あんな }

かとびっくりした。

こんなが一般的であろうが、そんなを使う間違いが多かった。これは引用節なので感じた時点でのこんなをつかう。

◆ 引用節の場合は引用されている部分が独立していると考えて良い。

今までみてきた間違いをよく考えてみると、学習者の考えがちな原則というのが日本で言われている通則と違う点にあるようである。特に「勢力圏」の捉えかた、感じかたの違いが誤りの原因になっているようだ。誤った「コソア」をえらんだ学習者の多くは、話し手の所有物やよく知っている人、こと、場所などを近く感じて<コ>を用い、話し手自身の所有物ではないもの、直接関係のない人、こと、場所などは遠く感じて<ア>を用いる傾向があるようだ。また他者の所有物の場合、どういう場合に<ア>になるのかが理解しにくいようである。

Ⅱ. 文脈指示用法通例とそのキャンセル条件

文脈指示用法に関しては、眼前指示と同様にいろいろな論稿があるが、久野(1973)の説がよく知られている。(p.184)

＜ソ＞：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

＜ア＞：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

＜ア＞を久野(1973)の説のように眼前指示と文脈指示に分ける方が説明しやすいのか、三上(1970)のようにわかる必要がないのか議論の分かれるところである。実際には「共通知識」の関わってくる＜ア＞の誤用が大変多かったのでここでは便宜上、久野の説に従い文脈指示の＜ア＞として扱うことにする。

1) 話し手の親族等の場合

次の例をみてみよう。

例5 1 A：御主人は今お宅にいらっしゃるの。

2 B：いいえ、

{	この
}	その
}	あの

人は今出張中のよ。

例6 1 A：君のお父さんと、酒場であったよ。

2 B：またかい。

{	この
}	その
}	あの

父にはいつも困らせられているんだ。

例5では2 Bはあのが正解なのだが、そのを選択した答が多かった。AがBの主人を知っている場合は久野の通則通りだが、知らない場合もBはあのの人を使える。知らない時、久野の説では＜ソ＞になるはずだが、この場合は＜ソ＞がキャンセルされて＜ア＞になる。この用法の＜ア＞は前の文脈に関係なく用いることができる。つまり＜ア＞は「どの人」に対する「あの人」ではなく、聞き手も暗黙のうちに想定できる対象を＜ア＞で表していると考えられる。例6もあのが正解。

例5と例6は同じあのであろうか。例5の場合は特に含みのないあのであるのに対して、例6のあのは「父」とそれに付随している「例の」ということまで含めてイメージすることが多いようだ。

◆ 親族等近い関係をさす場合文脈指示の＜ソ＞は用いられず＜ア＞になる。

2) 聞き手も同じ思考過程をたどると予測できるとき

例7 1 A：今度買った車，調子はどう。

2 B： $\left\{ \begin{array}{l} \text{この} \\ \text{その} \\ \text{あの} \end{array} \right\}$ 車は，故障が多くて困ってるんだ。

例8 1 A：きのう，めずらしい石を拾ったんだ。

2 B：へえ，どんな石。それ，今持ってる。

3 A： $\left\{ \begin{array}{l} \text{これ} \\ \text{それ} \\ \text{あれ} \end{array} \right\}$ は，家においてきちゃった。

例7 2 Bの正解あのをそのにした答が多かった。1 AはBの車のことを「よく知っている」ことにはならないから，久野の説では<ソ>になるはずである。しかし，親族等の場合と同様，どの車に対するあの車ではなく，聞き手も暗黙のうちに話し手と同じ対象およびその付随事項までをふくめ想定できる場合の<ア>になる。

例8 2 Bのそれははほとんど問題がなかったが，3 Aのあれをそれにした人が多かった。例7と同様，聞き手が暗黙のうちに，同じ過程を通り想定できると話し手が予想した<ア>であろう。

◆ 話し手の話したい対象を聞き手が想定できるだろうと話し手が予想した時，<ア>を用いる。

3) 共通知識について

例9 1 A：私は金鳳繹という先生に日本語を習ったんですが，今晚 $\left\{ \begin{array}{l} \text{この} \\ \text{その} \\ \text{あの} \end{array} \right\}$ 先生と会うことに

なっているんです。

2 B：その方は何歳位ですか。

1 Aのそのをあのとする誤りが韓国語の人に多かった。原因としては「共通知識」のとらえかたが違うのではないかと考えられる。つまり日本語では，話題に上る前から既に知識がある場合にしか「知識」があったと見なされないのに対し，韓国語式の考え方は，その場で得た知識も「共通知識」となるようである。例7では1 Aが，「金鳳繹という先生」として話題に出したあとは，Bは「知識」があるものとして「共通知識」の<ア>を用いたと思う。しかし日本語ではこの段階では「共通知識」にはなり得ないのである。

◆ 話題に上る前から知っていなければ「共通知識」にならない。

◆ 話題に上る前から知っていなければ「共通知識」にならない。

例10 1 A：次回の研究会は、来週の木曜日でしたね。

2 B：はい、そのはずです。でも、

この
その
あの

ときもう一度電話してみてください。

2 Bの正解はそのであるが、あのとする誤りが中国語の人に見られた。1 Aも2 Bも知っていることだからあのにするという理由である。これは久野の「共通の経験」がないと「よく知っている」ことにならないから<ソ>を用いるという説明が当てはまるだろう。したがって、時間的には過去のことしか<ア>が使えないようである。

4) 意義ある新情報がある場合

例11 1 A：三丁目の角、知ってるだろ。

2 B：うん、大きな交差点のある。

3 A：さっきあそこの角で事故があったらしいよ。

4 B：どうして知ってるの。

5 A：田中さんがちょうど

ここ
そこ
あそこ

を通りがかったんだって。

3 Aは二人とも知っているということで<ア>を使うが、5 Aでは<ア>よりも<ソ>の方が適当であろう。これは「事故があった」ことが重要視され文脈指示の<ソ>になる。

◆ 意義ある新情報がある場合にはそれを優先させる。

以上から再び学生の考えていると思われる原則を推測してみよう。先ず文脈指示として直前に話題に上がったものを指すときは、共通理解等は考えずに<ソ>を使う誤りが多くみられた。

また、共通理解に関しては、「何を称して共通の遠方知識」と呼び得るのかの解釈の違いがあるようだ。久野の考えている共通知識とは、人物の場合でいえば「直接的な知遇」がある、もしくは有名人のように「面識があってもおかしくないくらい彼についてよく知っている」ことであり、事物や事項では「直接的な知識」や「直接的な経験」のことだといっている。しかし、単にそのことを知っているだけでも、「共通知識」ととらえている例が学習者にみられた。

Ⅲ. プレースメント・テストでみられた誤り

プレースメント・テストから同様の誤りを検討してみよう²¹⁾。

1 太郎「ヨークっていうレストラン知ってる？」

2 花子「知らないわ。どこにあるの、そのレストラン。」

3 太郎「トレモントホテルの近くだよ。」

4 花子「ああ、そこなら行ったことがあるわ。」

5 太郎「あそこは安くておいしいね。」

6 花子「そういえば、きのう本屋で筑波のおいしい店についての本を見たけど知ってる？」

7 太郎「うん。ばくも持ってる。あの本はとても人気があるらしいね。」

5 太郎のあそこを韓国語が母国語の受験者のうち63%はそこににした。また、7 太郎のあのも58%はそのを選択している。韓国語の場合、特に共通知識の<ア>と<ソ>の区別が難しいようである。

(問題と結果はAPPENDIX を参照)

2 花子のそのを中国語の受験者の56%があのを選択した。まだ知らないから遠く感じるため<ア>になったのだろう。久野の文脈指示の通則が理解されていないようだ。

現段階では国ごとに、なぜこのような間違いが起こるのかという調査が足りないため、これ以上の検討ができないが、今後母国語との対照を行いたいと思っている。

Ⅳ. まとめ

コソアのどれを選択するかという時、様々な要因がかかわってくる。学習者の様子を見てみると、一度選択したあとでも自信がなく、別のものを選択するケースも多くみられた。コソアのうちどれを使うか、まだはっきり掴めず、簡潔に決定できるような原則を求めている状態のようだ。

学習者の誤りの中には、通則と異なった独自の原則に従いがちな場合と、通則の解釈の違いによる場合がみられた。たとえば眼前指示用法の物理的距離と心理的距離の問題である。話す相手、内容により「勢力圏」の解釈の仕方が異なることから生じる誤用の例が多いようである。文脈指示では何をもって共通知識となるのか、「共通知識」ということの解釈上の違いから起こる誤用の例がいくつかみられた。

今後の課題としては、誤りやすい問題の検討を進めて行くことと平行して、自然な場面での誤用例の收拾と分析を行いたい。また、母国語による誤用の差異も、韓国語、中国語の場合で見られたが、さらに他の言語も取り上げて、各言語共通の誤りと独自の誤りの検討を行っていきたい。

注

- 1) 対象は筑波大学と東京外語大学の留学生。問題作成は寺村秀夫、三枝令子、酒井たか子があつた。
- 2) プレースメント・テストに関しては、三枝令子「プレースメント・テストの統計的処理の試み」（本論集）にテストの概要、結果、分析が詳しく述べられている。

参考文献

- 久野 暁 『日本文法研究』1973 大修館書店
佐久間鼎 『現代日本語の表現と語法』1966 くろしお出版
三上 章 『文法小論集』1970 くろしお出版
三上 章 『現代語法新説』1972 くろしお出版

APPENDIX

プレースメント・テストの問題と結果

筑波大学留学生教育センターで1986年10月に行ったプレースメント・テストのうちコソアに関する部分である。問題と母国語別の選択の結果を以下に示す。

問題

太郎「ヨークっていうレストラン知ってる？」

花子「知らないわ。どこにあるの、（ 1 ）レストラン。」

（1） [1. この 2. その 3. あの 4. どの]

太郎「トレモントホテルの近くだよ。」

花子「ああ、そこなら行ったことがあるわ。」

太郎「（ 2 ）は安くておいしいね。」

（2） [1. あそこ 2. そこ 3. ここ 4. あちら]

花子「（ 3 ）いえば、きのう本屋で筑波のおいしい店についての本を見たけど知ってる？」

（3） [1. こう 2. そう 3. どう 4. ああ]

太郎「うん。ぼくも持ってる。（ 4 ）本はとても人気があるらしいね。」

（4） [1. この 2. その 3. それの 4. あの]

結果

人数は中国語32名、韓国語24名、その他43名、合計99名である。表の数字はパーセントを表わす。

(単位：%)

(1)

母国語 選択肢	中国	韓国	他	全体
1	6	4	2	4
2	28	58	58	49
3	56	17	28	34
4	9	21	7	11
無答	0	0	5	2
合計	99	100	100	100

(2)

母国語 選択肢	中国	韓国	他	全体
1	56	33	63	54
2	38	63	16	34
3	6	4	12	8
4	0	0	7	3
無答	0	0	2	1
合計	100	100	100	100

(3)

母国語 選択肢	中国	韓国	他	全体
1	13	4	5	7
2	72	92	67	75
3	16	4	14	12
4	0	0	9	4
無答	0	0	5	2
合計	101	100	100	100

(4)

母国語 選択肢	中国	韓国	他	全体
1	41	13	28	28
2	28	58	26	34
3	6	0	0	2
4	25	29	44	34
無答	0	0	2	1
合計	100	100	100	99

(特別推進研究 (1) 課題番号600600015

日本語の普遍性及び個性に関する理論的及び実証的研究 代表者 井上 和子)